



特定非営利活動法人
日本リザルツ

平成29年度 事業報告書

日本リザルツ
平成30年3月5日作成

04

APRIL

2017年04月01日

CHV 同行記

日々結核予防・啓発活動を行っている CHV に同行し、今回は 2軒の世帯を訪問した。一人は結核患者の年配の男性、もう一人は年配の女性で、CHV が結核の疑いがあると判断し、痰の検査を行っている。男性は 2カ月前に罹患していることが判り、CHV が病院に連れて行き、医者から薬をもらって一時回復してきた。しかし、途中でかゆみが出てきたため、医者から別の薬を渡され服用していたが、アルコール依存症でもあることから、薬の服用が不規則になっているとのこと。現在担当の CHV が様子を見ているが、本人は足が悪く、CHV が車を手配して病院に連れて行ったこともある。女性の方は、時たま咳き込むことから、検査を奨められ結果を待っている。この方は目が弱く息子さんと一緒に暮らしで、暗い部屋で殆ど過ごしているようだ。事前に訪問することを伝えていたので、人が来てくれることは嬉しいのだろうと思った。男性とは外で話を聞いていたが、その時近くで中年の女性が我々の様子を見ていたので、最初は男性の家族かと思っていた。男性との話が終わった後、その女性が CHV に話しかけてきた。CHV は手提げ袋の中から、小さな容器を取り出し、彼女の名前を記入して渡していた。実はこの女性は患者の家族ではなく、自身が結核に罹っているのではないかと心配になり、CHV に相談してきた。たまたま我々を見かけたのか、事前に来るのを聞いていたのか不明だが、CHV が着ていた “We ❤ JAPAN” が目に留まつたならば、Tシャツが役目を果たしたことになる。小さなプラスチックの容器は、痰を検査するためのもので、採取後 CHV が Health Centre のラボに持っていくことになっている。活動の途中で声を掛けられ、相談に乗って欲しいと言われた場面に遭遇したのは、偶然にしては滅多にはないと思った。CHV の人たちとっても、遣り甲斐を感じたのではないだろうか。



訪問時の様子(ご本人の了承を得て撮影)

CHV と Health Centre の方と一緒に
相談を受け容器に名前を記入して渡す CHV
二軒目の女性宅にて

2017年04月02日

第3回スナノミキャンペーン総集編

3月19日-3月26日、8日間にわたり「第3回スナノミキャンペーン」を開催した。キャンペーン期間中、随時速報をブログアップしていたが、今回は総集編。

今回のスナノミキャンペーンはケニアのエスンバ村があるブニヨレ地域に40万人以上いると言われている、スナノミ症感染者の治療と、2度とスナノミ症の恐怖に脅かされないように予防を行うものだ。



対象：ブニヨレ地域(人口約70万人)で生活するスナノミ症患者(約3.5万人)
り患率は5%と推測)

目標：400名の治療、400家屋の洗浄・予防。(重度患者・孤児・高齢者が中心)

費用：クラウドファンディングでみなさまからご寄付を頂戴した約100万円

実施期間：2017年3月19日~2017年3月26日(8日間)

実施場所・日時：

19日-20日

- Sofia Shopping Centre, EBUKANGA
- Ebukolo Chief's Centre, EBUSIEKWE

21日-22日

- Ebumbuya Jeshila Wokovu, EMMABWI
- EKhakamba Church, EBUYANGU & EMMALI

23日-24日

- Musinaka P.A.G Church, MUSINAKA
- Khusiyonga Church, ESSABA

25日-26日

- Musirili Church of God, ITUMBU
- Emmwatsi Primary School, EMBALI

計8箇所、8日間のキャンペーン。

結果：

治療:487名 洗浄・予防:800家屋(家族)以上







予想の通り 70%が 0-16 歳の子どもたち、10%が 50 歳以上の高齢の方々だった。最年少は 8 ヶ月、最高齢は 78 歳。エイズ孤児で祖父祖母の家で生活する子どもたち、障がいをもち身体を動かせない高齢の方が多く訪れた。8 日間、エドワード、地域住民とともにヘトヘトになりながら、やり遂げた。500 名近い患者さんを目の前にして治療し、800 家屋以上の家を訪れ洗浄した。朝早くから動き出し、夜遅くまで反省会をし、多くの方に迷惑をかけ、無理を言った。終わってみると、疲れより、達成感が勝っていた。人の集まりが悪かった 3 日目、あるボランティアが 1 軒 1 軒回ってくれた。その後患者が続々訪れた。5 日目、スプレーをしに行っていたボランティアが、動けない高齢のスナノミ患者のために治療法を詳しく教えてほしいとのことで、看護師の方に治療法を教えてもらい、走って治療に向かった。2 日目から最終日まで、エムハヤ準郡のパブリックヘルスオフィサーが毎日訪れ、一緒に治療をしてくれた。6 日目にはビヒガ郡の医師も訪れたので、器具(カッター・ゴム手袋)、薬が足りないことを伝えた。翌日から毎日少しづつではあるが、器具を持ってきてくれた。最終日 8 日目には、ケニア西部をカバーするテレビ局 West TV の方が取材に訪れた。スワヒリ語放送のためエドワードがインタビューを受け、「ケニア保健省はスナノミ問題について重い腰をあげるべきだ。我々は協力することができる。」「スナノミ予防のための靴を送るという素晴らしい日本の支援に対して感謝したい。」述べた。この映像はケニア全土で放映されるテレビ局 K24 でトップニュースとして報道された。その他 3 つのラジオ局でも報道され、キャンペーン終了後からエドワードの電話が鳴り止まない。

2017年04月03日

[ニュース]パレスチナ難民支える「母子手帳」、アプリ版運用開始へ！

日本リザルツは国連パレスチナ難民救済事業機関（UNRWA）のキャンペーン事務局をしている。今日の朝日新聞に面白い記事を発見した。



ar تطوير هذا التطبيق بدعم من الوكالة اليابانية للتعاون الدولي
THIS APPLICATION WAS DEVELOPED WITH THE SUPPORT OF JAPAN INTERNATIONAL COOPERATION AGENCY

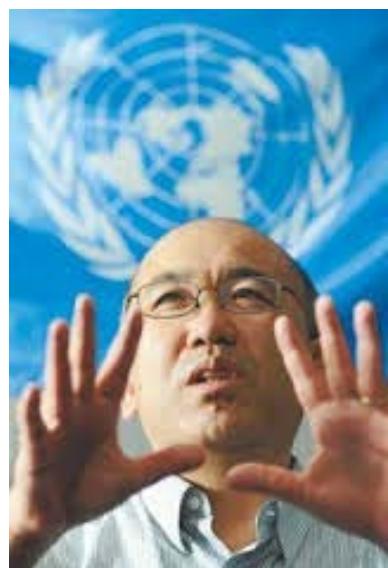
なんと、パレスチナ難民の母子手帳の電子版が、国連と国際協力機構（JICA）の協力で完成した！

記事によると、電子版の母子手帳は、4月4日から約200万人のパレスチナ難民が暮らすヨルダンで運用が始まるそうです。スマートフォンのアプリで母子の健康情報を管理することで、万一、紙の手帳がなくても避難先で継続した健診が可能になるということだ。実は、母子手帳は日本で戦後に考案されたもの。日本において母子の死亡率低下に貢献したことから、途上国での普及が進んでおり、現在はおよそ40か国で広がっています。パレスチナでは2008年に導入が始まり、これまで、パレスチナ自治区とヨルダン、シリア、レバノンの難民キャンプなどで生まれる新生児に、自治政府と国連パレスチナ難民救済事業機関（UNRWA）が手帳を配布してきた。電子版の普及にご尽力されているのは、UNRWAの清田明宏保健局長。

清田保健局長は日本人医師。

日本の知見を活かして、パレスチナ難民ために保健分野の改善に取り組んでらっしゃる。

日本の知見を活かして協力をすることで、パレスチナ難民のみなさんが少しでも笑顔で健やかに生活できる環境づくりが進むといいと思う。



2017年04月04日

ナイロビ生活 vol1 “帰って来ましたナイロビ編”

エドワード家族のお手伝いのお礼として、カカメガの家の引っ越しを手伝うことになり、26日から5日間、荷物の整理から庭の大掃除、荷物の運搬(新居までは歩いて数分)まで、全てをこなした。私の働きにチャリティもきっと喜んでくれたと思う。4月1日のスケジュールは早朝カカメガで起床、すぐにケニアンティーをがぶ飲み、エスンバに向かいパッキング、昼の2時にはキスム空港に向かうという、怒涛のスケジュールだった。

そして大都会ナイロビに着いた。エスンバとは大違った。



①スーパーマーケットがある。

エスンバで買い物をするといえば、小さな商店。なんでも売っている(野菜から文房具まで)コンビニのような便利なお店がたくさんある。ナイロビではスーパーマーケットです。カゴを持って、商品を手にしながら店内を歩き回り、レジに持っていく。英語がしゃべれない店主と拙いスワヒリ語でオーダーする必要はない。

②街中で人達が英語喋っている。

エスンバでは英語が喋れる人は一握り。基本はルヒヤ語です。Denise が少し日本語を喋るように、私もスワヒリ語が自然と出てくるようになった。Denise に「スワヒリ語、喋れるの?」と聞かれたら「キドーゴ(ちょっとね)」と答えた。エスンバにいる間、「日本に帰りたい」という気持ちより「ナイロビに帰りたい」と思っていた。それだけエスンバ-ナイロビでの違いが大きく、日本-ナイロビの違いが小さいのか、身をしみて感じた。

春がきた!

春といえば人事異動の季節。リザルツと普段から交流のあった内閣官房 新型インフルエンザ等対策室の田中剛氏が広島県健康福祉局 医療・がん対策部長に異動された。内閣官房での最終日には大変お忙しい中、リザルツにもご挨拶にきてくださいました。親しみやすいお人柄で、リザルツの様々なイベントにも積極的に参加していただいていた。広島県でのご活躍を願っている。

写真は内閣府下の交差点から



また、春は運動を始めるのにも良い季節です。内閣官房新型インフルエンザ等対策室長・国際感染症対策調整室長の山田安秀氏は、2月27日の東京マラソンにリザルツのWe love Tシャツを着て参加され、見事完走された。リザルツ一同大変嬉しく、早速ブログに掲載させていただいた。山田氏の雄姿

は月刊ランナーズ5月号にも掲載され、3年かけて東京都23区で名のつく坂、計916を楽しみながら走破され、今は多摩地区にまで足を延ばされている。

2017年04月05日

スナノミフィーバーが止まらない！

日本リザルツが始めた運動靴回収事業、Q&AAA（トリプルエー）+プロジェクト。

全国のみなさまからの応援のお陰もあり、続々と運動靴が集まっている。お友達に声をかけて集めて下さっている方、お手紙を同封して下さる方、そして、オフィスにわざわざ運動靴を持ってきてくださる方もいらっしゃり、日本リザルツのオフィスは靴の山に…

また、運動靴の整理のお手伝いをして下さる方も出てきており、応援団が続々と増えている。日本リザルツでは運動靴を定期的にケニアに運ぶ仕組みを作るべく、エチオピア航空様はじめ、関係各機関と話を進めている。



3月29日釜石市役所訪問

釜石市で活動する「青葉通りこどもの相談室」を指導して戴いている釜石市役所子ども課の皆さんを、横糸弁護士を筆頭に、白須代表、弊方のスタッフの社会福祉士と訪問し、意見交換をさせて戴いた。東北大地震のつめ跡の残る釜石市は、表面上は落ち着きを取り戻しているように見えるものの、生活の激変した家庭も多く、地域の皆さんのご協力を得て暖かく子どもたちを見守る「子ども課」の皆さんとの日頃のご苦労の一端に触ることができた。弊方からは、離婚時のADR（子どもの視線に立って将来の養育計画をご両親で相談戴くシステム）の説明を差し上げた。いつの時代も「子どもは社会の縮図」であり、環境の激変に晒される子どもたちには、「子ども課」の皆さんのが説るように、多面的で包括的なアプローチが必要になる。そうした活動の一助になり。いわば「釜石モデル」ともいうべき活動が展開できれば、と考えさせられる一日だった。



ケニア大使館訪問

東アフリカで猛威を振るうスナノミ症対策として、日本リザルツでは Q&AAA（トリプルエー）+プロジェクトと題して、「ケニアに靴を送ろう」と、全国の皆さんのご厚志を募っている。日本リザルツの事務所の一室は、皆さんの熱いご厚意の詰まった靴で、半分埋まりかけて、スタッフ一同、嬉しい悲鳴を上げている状態だ。先日、当団体の白須代表がケニアを訪問した際に、そうした靴の一部を持参したりしたが、より大規模にケニアに運ぶために、民間会社のご協力を得て輸送を行うシステム作りを進めているが、ケニア大使館に輸送作業と通関作業のペーパーワークのサポートを戴くために相談に伺った。大使館では、Minister Counsellor の Mr. Kaliih から、個人的に知人から聞いたスナノミ症の体験と、日本の皆さんとの暖かいご厚意への感謝の表明を戴き、今後の通関作業に関して貴重なアドバイスを貰うことができた。

2017年04月05日

ボランティア活動の次年度計画

ナイロビ市内のスラム居住区で実施している「結核予防・啓発活動」事業は、一旦今年7月で終了する予定で、8月から新たに開始すべく、現在事業申請に向け手続きを進めている。今度の事業では、これまでのCHV(Community Health Volunteer) 80名に加え、新規に100名のCHVに対し研修を実施し、養成していく他、現在ある結核診断・検査所を建替え、患者受入れや衛生管理を整備するとともに、最新の解析機器の導入により、より早く正確な診断結果が出せる体制を築くことで、結核保菌者の早期発見、感染防止に結び付けていく。更に、CHVの人たちが自主的に始めた清掃活動などが、地域コミュニティや子供たちとの交流の場になり、一般住民や子供たちに、結核予防だけでなく、衛生管理などに対する意識を変えてもらう機会を設けることも計画している。現在実施している事業の成果が、次の事業の進展に弾みとなって、当初目標としている結核患者の減少に繋がることを願っている。

2017年04月06日

滞在先の好感度

途上国に滞在していると、便利さ・快適さ・マナー等様々な面で、日本にいる時と比較してしまう。一般的に言えば日本の方が勝っている項目の方が多いと思うが、人によって判断、考え方が異なるのでそうとは言い切れないこともある。一つには、滞在先の国または地域に対する思い、そこに暮らす人々との交じり合いなどが考えられる。インフラ整備が整っていない不便さがあっても、心の優しい住人たちに囲まれて生活していれば、不便さも薄れてくるはず。ここナイロビは、人口が多いこともあり道端には多くのごみが散乱している。かつて舗装されていた道路も、傷みが激しく至る所穴が開き、車で通るたび大きく揺れる。もう一つ上げるとする、丁寧さ・サービス精神に欠けるところだろう。この辺は大きく国民性や長い間の慣習から来ているため、そう簡単には修正出来ないかもしれない。そんな中、個人的にいかにも優しそうな人柄の方や、意外に親切にしてくれる人に出会うことが多い。我々が支援しているCHV80名も、様々なタイプがいて、愛想の良い人、元気の良さそうな人、真面目そうな人、きつそうな人等がいるが、話してみると外見とは違う意外な感じを受

けることもある。徐々に慣れてくると、見方もかわってくる。数ヶ月でしかもたまにしか合わない人たちの人柄、性格を知ることは出来ないが、活動に携わっている時の気持ちに、違いはないよう願っている。

ナイロビ生活 vol2 “デニスと大親友になろう編”

あらゆる街、地域で強力な協力者がいることは心強い。特に日本とは違う文化・慣習を持つケニアでは、非常に重要であらゆる活動をする上でいなくてはならない存在だ。私にとって、エスンバではエドワード(Edward Khaliti)だ。彼は今までの活動の中で激しく喧嘩をし、夜中まで語り合ったこともある気心の知れた間柄だ。

ナイロビではデニスだ。

4日。今日から始まった CHV Meeting の準備をするデニス。



協力者とは“良きパートナー”であり、“大親友”であることが重要であると思っている。思い切り議論でき、思い切り冗談が言えることが、良い事業をつくっていくと確信している。デニスはこれまでのカンゲミでの結核事業に関わり、この事業の重要性を理解しているだけではなく、日本に訪れたことがあること、日本語に興味があること(少ししゃべれる)。ケニアの文化・慣習を客観的に見ることができる。(ケニア人はこうであると理解している人は多いが、大半の方はそれを変えられない、だから従ってくれ、という姿勢だ。エドワード・デニスはケニアのやり方を客観的に見て分析し、日本のやり方のほうが良いと理解を示し、他の方々にそれを理解させる力があると思う。) 彼ともよくしゃべり、日本語を教え、スワヒリ語を教わり合いながら、良き協力者になっていければと思う。今日は月に1回の CHV Meeting。2つの地区の CHV が集合し、3月の CHV 活動の記録を集め、一人一人に助言する日だ。私は、CHVのみなさんと仲良くなろうと積極的に話しかけ、名前と顔を覚えようとした。

カンゲミの CHV の中にはチームワークが出来上がっているな、と感じた。



2017年04月07日

ジカ熱、世界拡大により2兆円の損失>対策のため航空券連帯税が必要

ユニットエイドの（航空券連帯税に対する）メルシー・バナーが掲げられたパリ／シャルル・ド・ゴール国際空港（パリ空港公団の CSR）



中南米のみならずアジアでも感染拡大が見られたジカ熱だが、そのための医療費負担や観光客の減少等により最大2兆円もの損害を被った、と昨日UNDP=国連開発計画が発表した。今日の地球規模の感染症の拡大の要因のひとつに、国際航空網の発達がある。飛行機を利用する乗客は、絶えず感染症を拡大するというリスクを負っている（運航している航空会社も）。したがって、リスク発生に備えて、利用

客はコストの負担も必要となっている。このコスト負担の方法が、航空券連帯税の実施のコンセプト。航空券連帯税の長所は、途上国でも容易に徴税を行うことができる、ということだ。実際、現在同税を実施している10カ国（または14カ国→これは日本外務省調査）のうち、7カ国（または11カ国）がアフリカ諸国。同税の収取は、ユニットエイド（UNITAID=国際医薬品購入ファシリティ）という国際機関に集められ、主に途上国のエイズ・結核・マラリアという三大感染症の治療薬等の提供に充てられている。日本でも航空券連帯税が実施されるなら、その収取は現実施国（フランス並み）の収取をもたらし、三大感染症以外の感染症へと対策を拡大することが可能、つまり、日本が多大な国際貢献を行うことができるようになる。

月例報告会合

今日は月例報告会合の日、この1ヶ月間で回った訪問先の状況をレポートにまとめ提出し、その後スタッフから総評や注意点などの話を聞いた。いつもの教会ホールとは異なり、Kangemi HealthCentre の集会所が会場となった。電灯もなく陽が射さない薄暗い室内、既に何人かのCHVの人たちが集まっていた。昨夜の大雨で道路が水に浸り、歩行し難い場所がいくつも発生したため、開始時間を少しずらせた。乾燥した土埃も、雨でぬかるんだ道もやはり、生活に影響している。薄暗い中での会合で静かなスタートとなったが、スタッフの巧みな話術で、いつの間にかいつの雰囲気に変わっていました。狭い部屋であったので、CHVの人たちとの距離が近く感じた。明日は残り2地区の報告会があり、来週は4日連続で地区ごとに追加研修が実施される。更に知識や対話技能に磨きをかけ、信頼をしてもらえるよう頑張って欲しい。



2017年04月07日

釜石生活⑮～三陸のワカメ～

釜石に来て、ワカメやメカブのおいしさに驚いている。「ワカメなんて、どこでも採れるものだし、味の違いなんであるの？」と思っていたのですが、いつしか、お土産に三陸のワカメを買うようになっていた。中でも感動するほどにおいしいのが「早採りワカメのしゃぶしゃぶ」。ワカメのしゃぶしゃぶって初めていただきましたが、ただザルに茶色いワカメが積んであるだけで、見た目の印象は「あれ？お肉はないの？色も地味…」というものだった。ところが、ひとたび茶色いワカメをお湯にくぐらせると、あ～ら不思議！鮮やかなグリーンに変わった。鮮やかなグリーンは「どうぞ召し上がり」のサイン。ポン酢であっさりいただく「早採りワカメのしゃぶしゃぶ」は、ヘルシーでおいしい南三陸の春の一品だ。



2017年04月09日

釜石生活 51 ~すみれの生命力~

週末くらいは寒くとも窓を開け放ち空気を入れ替えようと窓を開けると、足元に小さなすみれが咲いているのを見つけた。石がゴロゴロしていて、お花が咲くような場所ではないのに、けなげに一輪だけ咲いていて、心がほっこりした。同時に「頑張って！」とエールを送られているような気がした。すみれの生命力に感動した。



ケニアの人たちへの見方が変わった

ケニアに来てから丁度3ヶ月が経った。当初道端に散らばるゴミ、排気ガスを吐きながら、重苦しそうに満員の乗客を運ぶ乗り合いバス、カウンターやレジ係りの無表情な接客態度などをみて、ケニアの人たちの国民性、気質を感じ取った。暫くその時のイメージが頭に定着して、半ば諦めの気持ちでこちらの人たちを見ていた。しかし、いつの間にか人の顔が優しく見える回数が増えてきたようだ。偶然ではないと思う。しかも優しく見える時は当然のことかも知れないが、こちらに何らかの動作、挨拶をはじめ、警備員がドアを開ける時、道を譲り合った時など。こちらが外人だから、親切にしてくれているのだろうと、思っていた。だが、現地の人同士でも、意外と相手に配慮した行為をしている場面に、気が付くようになった。良い例が車の譲り合いだ。朝晩のナイロビ市内は、通勤・通学で各道路は激しい交通渋滞が起こる。車の先端を少しでも先に突き出し、前に出ようとする戦いの連続である。最終的にどちらかが譲るわけだが、この時は相手に配慮などしていないと考えている。自分さえ良ければ、周りはどうなっても気にしない。ちょっと偏見があるかも知れないが、言ひ当てている部分もあると思う。しかし多少余裕がある時は、配慮、親切心が現れている。車が右折する時、手を振って譲る合図をすることも、よく見かける。また、荷車を引いている人の先にロープが張られているのを、見ず知らずの人が、上に持ち上げて通してあげていた時など、一瞬心温まる場面に遭遇する。我々が事業展開するカンゲミ・スラム居住区、貧困層の人たちが多く暮らす街だ。経済的には決して余裕などない中で、コミュニティの繋がり、相互扶助の精神は存在している。本事業の活動部隊—CHVの人たちが、結核予防・啓蒙活動のためボランティアで、各家庭を回っている。コミュニティの繋がりの糸を更に太くする試みが行われている。

くまモン塗り絵展覧会いよいよ開催！

熊本地震からもうすぐ1年が経過する。日本リザルツでは、熊本地震を受けて防災絵本おまもりブックを作成した。おまもりブックには、ご当地キャラクターくまモンの塗り絵が付いている。熊本のみなさんに元気になってもらいたい！と全国、全世界で塗り絵大会が実施され、日本リザルツに寄せられた。



子どもたちはもちろん、プロの芸術家の方からも届いた。



集まった塗り絵は1,000枚近く。いよいよ熊本市国際交流会館でお披露目される。

場所：熊本中央区花畠町4番18号 熊本市国際交流会館

休館日：毎月第2、第4月曜日（月曜日が祝日の場合、翌火曜日）

熊本の子どもたちはもちろん、釜石、愛知、東京、そしてパレスチナ自治区ガザ地区や難民キャンプの子どもたち、ケニア、ネパール、タイ、ラオス、フィリピンなどなどたくさんの方にご協力いただいた。

2017年04月11日

美味しいパン

今日はいつもリザルツのいろいろな印刷物をお願いしている有限会社トータルマークティングプリントの田島さんが、彼のお客様である Daisy というお店のパンを持ってきてくださった。このお店のコンセプトは、「美味しい食事パンの店」だそうで、農林水産大臣賞を受賞した「クロワッサンB.C.」が人気商品とのことです。川口市内、蕨市内で6店舗あり、お店の職人の方々もいろいろなコンテストで受賞されている。お昼に皆でパンを美味しくいただいた。私はメロンパンをいただいが、とても軽くておいしいパンだった。



CHVたちの成長の標し

今日は3ヶ月振りの Follow-up Meeting、これまでの活動を振り返り、課題を見出し改善点を確認して、今後の活動をより効果的に行うための研修である。事業開始から半年が過ぎ、結核予防・啓発活動に携わる CHV も、活動を通して様々な状況に出くわし、問題解決に悩みながら、少しづつ成長している。特に今日の会議は、いつも以上に議論が白熱していたようだ。3つのグループに分かれ、討議した結果を模造紙にまとめ、代表者が前に出て発表する。以前は講師が、発表者や他の CHV に質問をして、議論を進めていたが、今回は発表を聞いていた CHV から質問が上がり、そこからまた、他の参加者が意見を言うなど、講師指導の進行形体から、フリートーキングに近い内容に変わったとの印象を受けた。望ましい研修内容かも知れない。これによって、これまで見えてこなかった課題や、事実が分かってくることもある。ただ、課題・問題解決のために、新たな物が必要になった場合、直ぐにそれを求めてくることがあり、まだ少し依存心が残っているようにも思える。順風満帆に物事が運ぶとは考えていないが、彼らにとっても、支援する我々にとっても、我慢して模索する時だ。このような状況を繰り返し、乗り越えながら各 CHV の自立心が更に育って欲しいと願っている。

日本リザルツ新聞第9号が発刊！

春爛漫の中、桜吹雪に間に合うように、リザルツ新聞第9号が出来上がった。目次大フィーバー中のスナノミ症やケニアの結核抑止プロジェクトなどなど、内容が盛りだくさん。ケニアのスナノミ症から、現地でのボランティア活動報告、ガザの廻揚げ、アフリカの歌姫イボンヌさんの来日、離婚と親子の相談室「らぼーる」の活動、栄養関連セミナーなど、多岐に渡った活動が掲載されている。残念ながら紙面の制約で割愛した活動もいろいろと。国会議員の皆さんをはじめ、多くの方にも配布させていただくので、日本リザルツの活動を見守って下さい。



世界栄養報告セミナー 4月17日開催

本日4月17日㈯、新潟県農業・園芸試験場にて「世界栄養報告セミナー」が開催されました。セミナーは、農業・園芸試験場の会議室にて開催され、約20名の聴講者が出席されました。セミナーでは、セイコーエス・エフ・エス・ホールディングスの代表取締役社長である吉川義和氏による「世界栄養報告セミナー」、新潟県の子供たちの貧困問題に対する取り組みについての発表があり、その後、新潟市立内閣小学校の児童たちによる歌謡パフォーマンスが行われました。また、新潟市農業・園芸試験場の施設見学が実施されました。

春といえば…

子どもの貧困解消のために
子どもファースト離婚をめざして

青葉通り
こともの相談室

離婚と離婚の相談室
らぼ～る

この複数のセミナーの開催情報を記載した複数のパンフレットやチラシが並んでいます。

4月17日（月）に開催予定の世界栄養報告セミナーについても記載がされている。



ナイロビ生活 vol3 "CHV Meeting+Follow-up Meeting 編"

先週には CHV Meeting が開催され、そして今週いっぱいは Follow-up Meeting が開催された。



最終日の今日は、ミーティング後にカンゲミを歩くことになっている。
カンゲミの空気を肌で感じて、見て聞いてくる。

2017年04月13日

株アシックス殿より靴の寄贈

4月12日に、株式会社アシックスの渋谷オフィスを訪問した。最先端のスポーツ用品の開発にまい進する同社らしく、オシャレな南青山の一画に居を構え、トレンディな洋服をキリリとまとい、国籍の異なる人たちが多く出入りする、スポーツを通じた多様な文化を体現するオフィスだ。今回は、ケニアのスナノミ症の防止のために、サンプルの靴を200足も寄付していただいたということで御礼に伺った。同社のCSRを担当する方、マーケティングを担当する方が、何と15箱もの段ボールに一杯の靴を梱包していただいた。日本のベストブランド40の一つに選ばれたアシックス社の、鮮やかな色彩の乱舞する先端的なデザインのスポーツシューズは、きっとケニアの青い空によく映えるのではないかと思う。

クラウドファンディングを通じた社会貢献の道を模索中

昨日の夕方、日本リザルツの会議室にて、内閣官房で新型インフルエンザや国際感染症対策担当の、長谷川企画官や福寿主査、グローバルヘルス技術振興基金(GHIT Fund)の佐藤 VPを迎えて、クラウドファンディングを通じて幅広い層の人たちからサポートを戴きながら社会貢献の道を拓く方向に関して議論が行われた。新しいスタイルの模索には色々と乗り越えるべきハードルはあるようだが、前向きに検討を進めていく方向でいる。日本リザルツが提起したケニアでのスナノミ症の問題も、こうした新しい土俵に乗せて対応を進められないか、結核や AIDS 等の感染症も包括的に含めて取り扱えないか、などなど、活発な意見交換が行われた。

ナイロビ生活 vol4 “カンゲミの「空気」編”

カンゲミという街、はどんな“空気”だったのか。書いてみようと思う。

カンゲミとはナイロビ市内から約 20 分、大通り沿い一帯にある。見渡せばトタン屋根の建物が立ち並び、ぎゅうぎゅうなほど人々が密集している。道の左右には小さな商店があり、野菜から果物、牛肉などの食材から、洋服、何かの電気機器に使うケーブル、鍬のような農業器具、さらには棺桶など様々なものが置かれ、売られている。確かに、ゴミが散らかっており汚い。私が 1 番嫌いなケニア人文化は所構わずポイ捨てをすることだ。その上、なんで汚いのに掃除しないの問うと、それは政府がやるべきだ。とケニア人お得意の政治の話に進んでしまった。まず捨てなきゃいい、集めておいてそこからは行政がやるべきかもしれない。と常々思う。カンゲミには 30 万人以上の方が暮らしている。(私の生まれ故郷、埼玉県春日部市の人口は 23 万人程度だと思います。) 正確な面積や人口が把握されていないが、明らかに人口密度は春日部市の数十倍だ。正確な面積や人口が把握されていない。スラム街には住所というものが存在せず(ただ家賃は存在する)、詳細な戸籍のようなものも存在しない。人が多いと自然と音も大きくなる。喋る音、車の音、店から流れる音楽、雑音のようでは私はなぜか心地よく感じてしまう。人が多い、音が多い。これがカンゲミの第一印象だった。



2017年04月14日

熊本地震から1年 白石

昨年の今日から1ヶ月後には熊本にいた。自転車に乗り、益城町総合体育館に毎日通っていたのを覚えている。被さい地の様子、避難所生活の様子は今でも忘れられない。1年経った今、お宅に温かく迎え入れてくださったおばあちゃん、もう一度お伺いしたいと思う。忘れないこと。重要。



2017年04月16日

「子どもファースト」離婚講習会

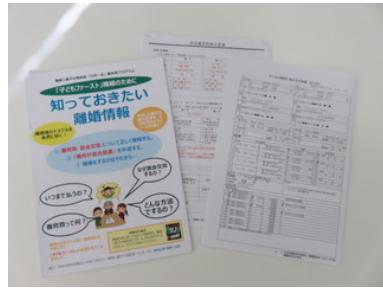
4月16日（日）、「離婚と親子の相談室 らぼーる」で「子どもファースト」離婚講習会が開催された。

この講習会は「親が離婚しても子どもの幸せを守る」をテーマに、養育費や面会交流について理解を深めるために実施される。社会福祉士の嶋貴養子さんがボランティアで参加者の相談に親身になって答えている。

オリジナルのテキストも配布される。

講座は参加者1人1人の気持ちに寄り添うことを重視している。参加者の方は、離婚後、子どもとの関係をどう築いていくかや、離婚に向けた協議の中で出てきた不安点や疑問点を積極的に質問され

ていた。この講習会は、小人数制を取っているので、大きな講義ではなかなかできないプライベートな質問もすることができ、毎回、参加者のニーズに応じた対応をしているのも特長。



釜石生活 52 ~子育て世代包括支援センター~

写真は、4月8日（土）の釜石新聞の1面に掲載された記事だ。市保健福祉部に「子育て世代包括支援センター」が創設された内容だ。こちらは、妊娠から出産、そして子育て期まで総合的に支援する施設で、市民が切れ目なく必要なサービスを受けられる仕組になっている。川の流れに例えると、「子育て世代包括支援センター」は本流で、「青葉通り こどもの相談室」やその他の相談窓口は支流で、それぞれの支流に人々が集い特色ある文化を形成しながら本流へつなげていく、そのようなイメージかと感じる。市民の利便性が高まり、子どもたちが釜石市で生まれ育つことを幸せに感じられるよう、サービスを提供する側は丁寧な対応とスムーズな連携、そして強い協力体制で臨みたいと思う。



釜石生活 53 ~青葉ビルのお花~

花には、人の心を和ませたり元気にしてくれる力がある。

青葉ビルで週2日働いておられる女性が
お手洗いに飾ってくださる花だ。
彼女はとてもセンスがよくて、「すみれ
をこんな風に活けることをよく思いつく
なあ」など、いつも感心、感謝している。



「家の庭に咲いてても、シカに食べられてしまうから」と照れて話されたが、私もほぼ毎日シカに遇うので、深刻な問題だ。3月の市議会の定例会でも質問が出ていた。

生花で楽しんだ後は、ドライフラワーにして、透明なセロファンで包んだり、
彼女のお花に対する愛情とセンスの良さに、毎日癒されたり、よい刺激を受けたりしている。



栄養と食に関するセミナー開催

昨日は、衆議院第一議員会館にて、午前は日本リザルツも共催する「2016年世界栄養セミナー」が、午後は「持続可能な開発目標達成(SDGs)に向けた人口と安全保障セミナー」と二つのセミナーが開催された。内外の著名な専門家が多数参加され、午前の部は約220名、午後の部は約180名の方の登録を戴き、国会議員の山東先生、今井先生、逢沢先生、官邸から和泉補佐官、外務省から森審議官、JICAの榎本上級審議役、それに民間から株式会社タニタ、味の素等の有名会社のご参加もあり、熱の入った議論が交わされた一日だった。当日の講演や議論は、日本リザルツが誇る「謎の美女」スタッフが後刻、詳報を伝えてくれる予定。「日本リザルツのスタッフは、新旧インターの方々を含めて総出で参加。参加者を誘導したり、受付をしたり、資料を配ったり、同時通訳のレシーバーを回収したり。裏方役をしっかりと務めて、会議の盛り上がりに少なからず貢献できたのではないかと思う。」朝早くから手伝って戴いたインターの方々、大変に有難うございました。また、一緒に会議を支えた他のNGOの皆さんにも、この場を借りて感謝を申し上げます。なお、二つのセミナーを終えた後のレセプションでは、日本リザルツの白須代表が、栄養改善に向けての政府に対する要請を含めて力強く挨拶をされた。白須代表の挨拶を含めて、会議の内容は次報に乞うご期待。

くまモン塗り絵展覧会へ！

4月14日で熊本地震から1年。日本リザルツでは、熊本のみなさんを元気にしたい！と、くまモン塗り絵大会を開催し、1000枚以上の塗り絵を全世界から集めた。熊本の子どもたちはもちろん、釜石、愛知、東京、そしてパレスチナ自治区ガザ地区や難民キャンプの子どもたち、ケニア、ネパール、タイ、ラオス、フィリピンなどなどたくさんの方にご協力いただいた。現在、熊本市国際交流会館の協力のもと塗り絵展覧会が開かれている。今日は、代表の白須、長坂に加え、今回は会計担当の門井も一緒に熊本へ向かった。



地震から1年。倒壊したビルも依然として残るなど、復興は道半ばだ。



展覧会が開かれている熊本市国際交流会館だ。





場所：熊本市中央区花畠町4番18号 熊本市国際交流会館

休館日：毎月第2、第4月曜日（月曜日が祝日の場合、翌火曜日）



続いて、日本財団災害復興支援センター熊本本部に挨拶に伺った。日本リザルツが熊本地震後、活動の拠点にしていた場所。梅谷佳明センター長と意見交換を行った。

普段はオフィスでお留守番が多い会計担当の門井も熊本の視察を満喫した。

2017年04月18日

GNRセミナー：レセプションも大賑わい！

4月17日、衆議院第一議員会館にて、日本リザルツも共催する「2016年世界栄養報告セミナー」と、「持続可能な開発目標達成(SDGs)に向けた人口と安全保障セミナー」という栄養に関する大イベントが開催された。お昼のレセプションは日本リザルツの長坂が司会をし、国際母子栄養改善議員連盟の副会長である逢沢一郎衆議院議員にご挨拶をいただいた。



逢沢先生は、今回のセミナーを契機にして、本当に支援を必要としている人々に確実に支援を届けるよう、最大限に尽力していくと提言された上で、栄養改善に向けて取り組みを行っている関係者が一堂に会する機会が設けられたことは非常に有意義であると述べられていた。また、昨今の難民問題情勢にも触れられ、誰一人取り残さない社会の実現の重要性を訴えられていた。夜のレセプションでは、日本リザルツの代表白須がスピーチを行った。その際の挨拶文を以下に記す。

「皆様、日本リザルツの白須紀子でございます。私たちNGOは、世界中のお母さん、子どもたちが、健やかで笑顔に過ごせる世界を目指して、頑張ってまいりました。漸く、地道な取り組みの積み重ねが形になりつつあります。より多くの方を巻き込みたい。今回のイベントは、初めて国際母子栄養改善議員連盟と公益財団法

人アジア人口・開発協会（APDA）様とご一緒に行いました。福田元総理大臣や議員連盟会長の山東昭子参議院議員を始め400の方々にご出席いただき、大盛況のうちにイベントを終えることができました。本当に多くの皆様のお力添えのお陰です。議員連盟のタスクフォースで策定された「国家栄養戦略」がここにあります。私は、日本政府と私たちが「栄養改善のための開発戦略」を策定することを提案致します。こうした戦略があれば、栄養改善に取り組む関係者にとって、大きな追い風になることでしょう。また、誰一人取り残さない社会、SDGsを目指すためにも、栄養の分野において、日本が更なるリーダーシップを發揮する必要があります。2020年の東京オリンピック・パラリンピックに向けて、1000億円の栄養への投資を、日本政府に、是非、お願いしたいと思います。撒いた種を育み、大きな花を咲かせるためにも、皆さん、一致団結して、栄養改善に向けた取り組みを加速させていきましょう！」

大盛況のうちにレセプションも幕を閉じた。

日本リザルツとゆかりのある方が新聞記事に

本日の日本経済新聞朝刊に面白い記事が掲載されていた。

内閣官房の研究（中）各省からエース官僚：官邸の意向、迅速に実現

キーパーソンの1人として、和泉洋人内閣総理大臣補佐官も登場している。日本リザルツとも親交が深く、昨年のGGG+フォーラムや先日開催された世界栄養報告セミナー（GNRセミナー）にもご参加いただき、ご挨拶をして下さるなど大変お世話になっている。また、今年10月10日に行われるGGG+フォーラムに関してもお力添えをいただいている。別の面には山崎達雄前財務官のコメントも掲載されていた。

経済対話 評価と課題 日本がイニシアチブとれた／2国間の交渉、進展は難しい

財務審議官時代には、第77回世銀・IMF合同開発委員会における日本国のステートメントを執筆された。このステートメントは、アフリカにおける保健問題の重要な課題として結核対策の重要性を取り上げた非常に意義のあるものになった。また、ストップ結核パートナーシップ日本の会議でも積極的に発言下さるなど、国際的な結核対策にご尽力をいただいた。紙面を通じて、日本リザルツとゆかりのある方の活躍の様子を知ることができるのは嬉しいものだ。

2017年04月19日

熊本視察2日目

当団体のスタッフで熊本視察に来ている。本日はくまモン塗り絵大会会場になっている熊本市国際交流会館で、くまモンの塗り絵やチラシの配布を行った。



東日本大震災で被さいした釜石の子どもたちも塗り絵に参加してくれた。現在、塗り絵の釜石バージョンを作成中。



日本リザルツのスタッフ、代表白須のお孫さんも塗り絵に参加してくださった。



お天気にも恵まれ、子どもたちも遠足で熊本城を訪れていた。くまモンガール長坂が子どもたちに塗り絵を配り、あっという間になくなった。



熊本のシンボルである熊本城も訪問。地震の爪痕が依然として残っていることを再認した。がんばれ！熊本。その気持ちを胸に日本リザルツスタッフは任務に励む。

ナイロビ生活 vol6 “ナイロビ事務所スタッフと打ち合わせ編”

現在ナイロビ事務所には私を含め3名のスタッフがいる。彼らと Follow-up Meeting を終えて振り返ってもらい、さらに今後の動きなどについて話し合いの場を設けた。

まずは Follow-up Meeting の振り返り

-成功ではあったが、多少効率が悪い部分があり、まだまだ改善できる点が多くあった。

“Follow-up”的意義は CHV の活動をさらに徹底させると同時に、リマインダー的要素もあり、誰しも活動に慣れてしまうと“なあなあ”になってしまう。そこで再度、CHV の必要性や活動の意味を再認識すること、CHV が集まり、悩みや不安を解消すること、活動の振り返りを行うこと、進捗を管理すること。それらが重要になる。

今後の動きについて

-延期になっているマルチ会合をどうするのか。

-CHV Profile について。私からの提案

“マルチ”とは何なのか。その会合の意義は、各セクターの方々の意見を聞き、あらゆる角度から事業を見つめ直すことに意味があると思う。

2017年04月20日

ナイロビ生活 vol5 “結核患者にお会いしました編”

私どもがスラム街のあるカンゲミ地区で行っているプロジェクトは「ナイロビ市のスラム居住区におけるコミュニティ主導の結核予防・啓発活動の拡大支援事業」というものだ。カンゲミでの結核発見率・治癒率を向上させることが上位目標だ。先週開催した Follow-up Meeting の後に CHV の方々にお願いして、2名の結核患者の方と会う機会を設けてもらった。

まずは1人目。

HIV/Aids・別の病気(脇腹に大きな腫れがあり詳しい検査が必要)との併発があり、体全身にだるさが常にあるような印象を受けた。その為、仕事をすることが難しく、脇腹の腫れについて検査するお金を工面することができない。結核に関しては治療が終了しているが、伴って発生した新たな問題に今も直面している。

そして2人目。

数ヶ月前にケニア東部に住んでいるときに体調を崩し、1ヶ月ほどの私立病院に入院の後、結核の診断を待つ間にカンゲミに引っ越し(家族がこちらにいる)、結核と診断され、その後は CHV のアドバイスを受けながら治療に専念している。

次に私が感じたこと。

・HIV/Aids(他の病気)との併発

これは難しい問題。結核患者にとって HIV は最大の敵と言われている。結核菌を保有していても実際に結核が発病するのは 10% と言われるが、HIV との併発の場合、その割合は爆発的に増加する。(欧米の研究によると 30 倍から 50 倍とも)

・仕事

結核の初期症状は長引く咳・痰・微熱。今回お会いした2人の患者の方々は全身にだるさがあり、以前までの

仕事は辞めなければいけなかったと話してくれた。仕事ができなくなることは収入減に直結し、生活の質が低くなる。結核の治療費は無料ですが、間接的に大きな犠牲を払っていることになる。

・CHV の役割

2人目の患者の方はケニア東部から引っ越ししてきたばかりだが、CHV は数ヶ月前からのカルテを持っていた。それはケニア東部の CHV から情報共有がなされている結果だ。CHV 制度は国家レベルの戦略のため潤滑に情報共有がされている。彼に詳しく話を聞くと、ケニア東部でも CHV に助けられ、カンゲミでも助けられたと話していた。

・結核治療費

ナイロビでの思いと今後

ナイロビ滞在 3 カ月余り、漸く今週久しぶり振りの日本に帰国しました。出発時は、ジャンパーやセーターを着ていたが、帰国した頃は既に桜の花も散り、夏日並みの気温を記録した地域もあるほど、それだけ期間が経過したのかと、様々な思いが廻ってきた。まずナイロビの気候については思いのほか暑くはなく、寧ろ朝晩の涼しさに、過ごしやすさを感じるほどであった。肝心の当団体のプロジェクトについては、実施現場である Kangemi スラム居住区は、当初聞かされていた治安面での不安も、足を運ぶごとに慣れ、住民の方々の顔も違って見えるようになってきた。仕事の上で直接顔を合わす、スタッフや CHV(本事業の活動に携わるボランティアの人たち)も、何回か接するうちに各人の顔や個性が、徐々に分かるようになってきた。それでも研修や会合で顔を合わせているが、彼らの生活や背景について、もう少し知っておいた方が良かったかも知れないと、後悔している。スラム居住者がボランティア活動を行うことは、我々日本人の感覚で考えるのとは、明らかに違った物差しで見る必要があるからだ。この様にやり残したことや、こうしておけばよかったなど、今となってはもう遅いが、いろいろな経験をさせてもらった。今後は別の視点で眺めることになるので、新たな感覚、考えが出てくるかも知れない。現場をある程度理解した上で、プロジェクト全体を管理していくようにしていきたい。

2017 年 04 月 21 日

【ニュース】武田薬品会長 長谷川氏が退任

先週、4月14日(金)の朝日新聞朝刊に武田薬品工業会長の長谷川閑史氏が6月で退任され、相談役に就かれるとのニュースが掲載されていた。長谷川氏はリザルツが昨年2月に開催した「GGG+フォーラム 2016 G7 サミットとグローバル・ヘルスの課題」にご出席いただき、武田薬品工業様と GGG との関わりについて貴重なご発言をいただいた。

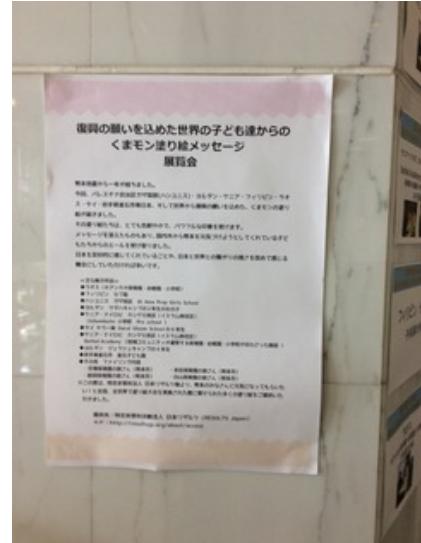


今年 10 月 10 日（火）に開催される「GGG+フォーラム 2017」にも是非ご出席いただきたいと考えている。

熊本出張報告

4月18日、19日に代表の白須とくまモンガール長坂とともに熊本を訪れた。国際交流センターで開催されているくまモン塗り絵展覧会の視察が目的。

私にとって熊本地震後、初めての熊本入りとなり、白須と長坂と別行動で益城町を訪れた。市内では地震の爪跡は熊本城以外では、そんなに強く感じられなかった、流石に益城町ではまだまだ多くの爪跡を見た。熊本市内から益城町に向かうバスからの風景にブルーシートで覆われた部分がどんどん増えていった。



復興にはまだまだ時間がかかるようだ。

益城町役場 渡り廊下が損傷し、立ち入り禁止となっていた。

お店もプレハブの仮店舗やテントでした。リザルツでは昨年5月から9月まで、熊本市内で支援活動を行っていた。



世界銀行の春季会合セミナーでワシントンDCに

白須代表と同道して、ワシントンDCで開かれている世界銀行の Spring Meeting に参加した。白須代表は、熊本から家に戻らず、羽田を深夜にたち、LA 経由で再び深夜便に乗り換えてという強行軍であった。会議内容は、世銀トップの Kim 氏や、ビル・ゲイツ夫人で、ビル&メリンダ財団の Melinda Gates が登場するシンポジ

ウムや、米国やカナダのリザルツのメンバーが登場するセミナーなど、様々な企画が目白押しで、人と熱気と情報が初夏を思わせる空の下で充満している。

「明日の世界を担う青少年への投資」の題の討論の中で、メリンドが

*今までの助成の成果を明確にして、よりスマートに新しいチャレンジを

*貧困の現状をより詳細に明らかにして原因解析を

*人が資本。それを強力な投資で支える。

と力説しており、ルワンダやパキスタン、モザンビークからのパネリストの体験に根差した議論が迫力を添えていた。



この会議は日曜日まで続く。

2017年04月22日

NGO ユニット全体連絡会・勉強会

昨日 NGO ユニット全体連絡会及びその後の勉強会に出席した。今回は ADRA さんの会議室をお借りし、JPF をはじめ各 NGO 団体から約 30 名が集まり、JPF の理事会や各委員会の協議内容、また、幹事会からの報告、計画などの話があった。NGO・外務省定期委員会に関する、今後の日程についても発表があった。この後の勉強会のテーマは「企業との連携について」、これまでにも連携については話題に上り、具体的な事例も紹介されていた。今回は JPFI が連携を遂行する上で、どのような役割を担えるか、NGO の意見を聞いて今後の JPFI 事務局の活動に活かすことを目的にしている。事例として紹介された案件や意見交換の中で示された連携の内容は、どうしても緊急支援の際の援助物資、輸送手段などに関わる際の企業活動の利用(活用)であった。ソフト面での連携も考えられるが、意見交換の短い時間の中で、考えを巡らせまとめるのは難しいと思った。オブザーバーとして参加された大手化学メーカーの CSR 担当者から、災害時の水と栄養の不足を補う試作品の説明があった。手のひら大の大きさでビニールの中に栄養素が入っているもので、この後グループに分け、この製品のメリット・デメリットを話し合った。日本リザルツも現在、スナノミ症支援で全国から靴の回収を進めしており、その中には企業の組織的な支援もあり、量の確保や効率面で大変助かっている。更に現地への搬送手段についても、企業との連携を図っている。

釜石生活 54 ~すみれちゃん~

先日、仮設住宅の前の、石がゴロゴロの場所にけなげに咲くすみれ1輪に励まされた、というブログを書いた。その後、「青葉通り こどもの相談室」に小包が届き、品名に「すみれちゃん葉書」と書いてあり、「なんだろう?」と思いながら開けてみると、こちらの葉書だった。

誰からも何も聞いていなかったので、うれしいサプライズプレゼントになり、粋な計らいだ。私が“すみれちゃん”に励まされたように、この葉書を手にした方も“すみれちゃん”からたくさんの勇気と元気を受け取られることと思う。



POST CARD



リザルツは、私たちは一人ひとりに世界を変えていく力があると信じています。
日本リザルツと親子ネットは、離婚後の親子が自然に会える社会の実現を目指します。また、東日本大震災で被災された方々を支援しています。

□電子断続熱土連 全国連絡会
<http://www.e-kisei.org/>

□親子の面会交渉を実現する全国ネットワーク
親子ネット
<http://www.kinshin-net.org/>

□被災子ども相談室
TEL:03-2623-2968

QRコード
すみれちゃん

釜石生活 55 ~東北の桜~

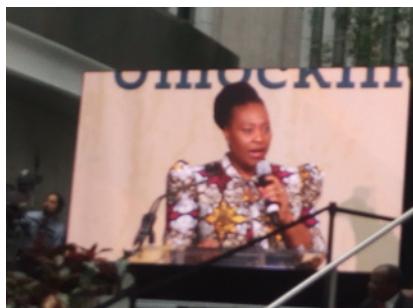
5月から始まる弁護士相談会、親共育プログラム、親子交流会（ホースセラピー）等のイベントのチラシができるたび、保育園、こども園、幼稚園、小中学校、生活応援センター、子育て支援センターなどの関連各所へ配る。釜石は広い街で、これらの関係各所を全部回ると1日では足りない。でも、車で1校1校訪ねて行くことで道も覚え、何より、学校側との信頼関係構築につながるので、出かけて行く機会を大切にしている。桜の名所や、岩手県内の温泉情報などもいただけることもあり、早速、先週、帰りに桜の名所を通ってみた。ちょうど満開で、その日は、車の中が砂だらけになるほど強風が吹き荒れていたが、東北の桜は忍耐強く凛としていて素敵だった。



2017年04月23日

世界銀行の春季会合セミナー参加（続）

本日は、世界銀行の Kim 総裁や、インドのタタ財閥のタタ会長も登場する栄養改善に関するメインイベント。JICA の戸田上級審議役も質問とコメント役で流暢な英語を披露された（勿論、IT 技術がコミュニケーションを各段に改善する個人的事例を含めて、素晴らしいものだった）。それに、本ブログにはたびたび登場するアフリカの歌姫のイボンヌも、短いながらも栄養改善への熱烈なメッセージと、その美麗な歌声を披露して、収容しきれない満員の観衆から万雷の拍手を浴びていた。



また、IMF のラガルド専務とマニューヒン財務長官という超大物同士の米国経済を巡る対談もあり、マスコミを巻き込んでの大聴衆。世界の政治の一つの中心であるワシントン DC らしい光景だ。もう一つの世界の政治（と経済）の中心は、アフリカだろうか。アフリカへの投資（インフラ、農業支援、栄養改善等を含め）を巡る会場は、非常に多くの人々が集まり、次回はより大きな部屋に会場変更が必要だと声が挙がるほど熱気に溢れていた。もう一つの世界の政治の中心である中国が（中国から参加されたらしい聴衆は散見するが）、こうした舞台に殆ど登場しないのも、難しい現実の一端を垣間見せてくれる。

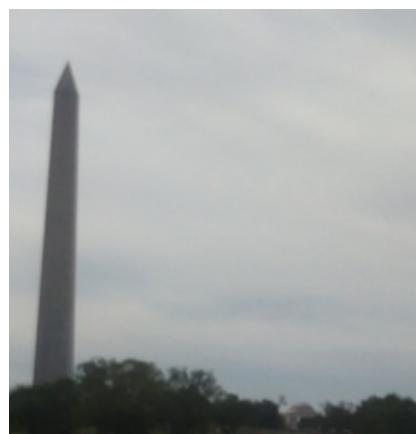
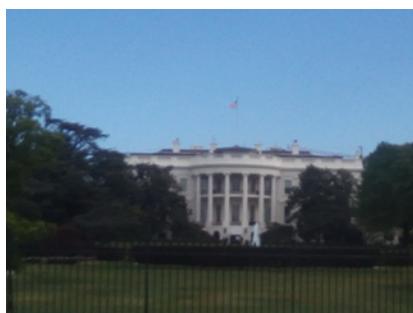
世界銀行の春季会合セミナー参加 発表者の発言一部

世界銀行の春季会合に伴って開催されるセミナーにおける栄養問題に関する発言の一部要旨を纏めた。
アフリカ諸国からの政府関係者たち：厚生担当と財務担当との間で、保健行政への資金枠の確保を巡って激しい議論が起こるという話が複数の発言者から。栄養問題の投資の重要性は認識した上で、より効率的な手法と、その実証性を更に高めて欲しいとの声があった。海外先進国でのドナーと呼ばれる投資国や各種財団に対する

義務としてだけでなく、自国でのより効率的な投資手法の選定のためにも、費用対効果の実証と把握が重要という認識は、少しづつ高まっている様だ。また、インフラの整備不足から、地域によって医薬が不足するだけでなく、地方への輸送費が高いがゆえに医薬品の価格が国内でも場所によって大きく異なるなど、医療費の地域格差が大きい点も UHC を進める上での大きな障害になっているとの指摘も。世界銀行の関係者から：ニュアンスは様々ながら、栄養問題に一定の進歩を遂げた国と、停滞している国とに分化している事から、前者のグループへの期待と後者のグループへの懸念を色濃く感じた。また、先進国内で進むポピュリズムの広がりもあり、先進国から発展途上国への援助増加に歯止めがかかりかねないとの危機感もある様だ。民間団体から、まず対象国の政治的不安定性と政治の腐敗の問題を指摘する声が少なくなかった。更に、発展途上国での支援活動に深く関与している民間団体からは、生活環境衛生の問題、トイレの不足の問題、清潔な水の不足の問題など、発展途上国のおかれた環境の問題、旧弊な結婚制度や低い母乳保育率、妊娠から保育までの女性のカウンセリングの不足など、実務的な問題の提起と対応の議論も数多く行われた。また、世界銀行の方も共有する関心ですが、栄養問題は SDGs の多くのテーマに関係する重要な基盤的テーマだけに、栄養に特化したプロジェクトだけでなく、栄養に間接的に関連するプロジェクト（nutrition sensitive という言葉が使われていた）が数多く、それらのプロジェクトをどう捉えるかで、栄養関連の投資の総額が大きく変わり、費用対効果の推定にも影響するという点が指摘されていた。ただ、栄養関連の投資がペイするという事実と、目標達成のために栄養関連への投資が絶対的に不足しているという認識は共通しており、栄養改善の成果を加速するためにも、各国や諸団体から今後の栄養への投資のコミットメントを求める声が大きく挙がっている。様々な意見や見解、提言を咀嚼しながら、日本での活動に反映していき、来る 10 月 10 日に予定されている GGG+フォーラムに栄養改善の活動とモーメンタムを繋げていければと思っている。

世界銀行春季会合セミナー参加 写真編

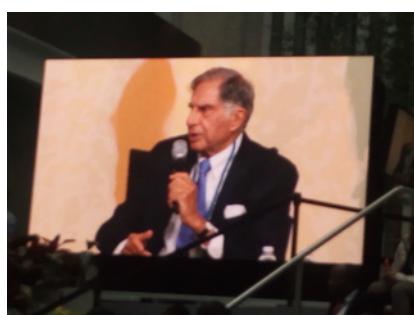
ワシントン DC はあいにく雨模様の天気だったが、今朝は青空が顔を出したので、朝の散歩をしてきた。それと、タクシーがオレンジ色なのにややビックリ。イエロー・キャブなどという言葉は死語になったのだろうか。ハイブリッドや電気自動車のタクシーも多く見かける。



まずは、ビル&メリンダ財団のメリンダ・ゲイツさん。スピーカーとしての登場だけでなく、栄養関係のメイン・イベントと言うべきセミナーでも、ビデオで登場してひときわ大きな拍手を浴びていた。同財団の若い職員も、色々なセミナーに顔を出しており、発表者に熱心な質問をしている姿が印象的だった。メリンダ・ゲイツがメンターとして若い世代を育てようとしている様子が窺われる。



そのセミナーは、世界銀行のキム総裁や、インドのタタ会長、イヴォンヌ・チャカチャカなどが登場。吹き抜けの明るい会場で、後部の立ち見も大型スクリーン脇の階段も、人が溢れていた。



一方、近くのホテルで行われた第二回 UHC 財政フォーラムにも多くの参加者が。アフリカからの参加者が目立った。本セミナーだけではないが、アジアからは前線で活躍される民間の方々が、アフリカからは保健行政を担当する行政官僚の方々の参加が目立っていた。



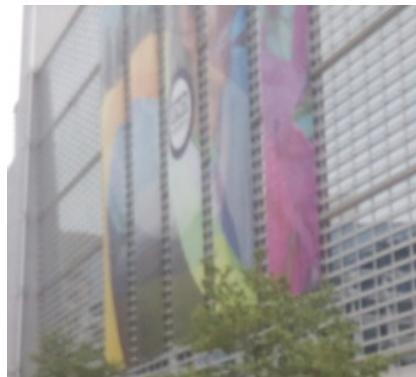
NGO を始めとする民間団体も多くのセミナーや討論を開催しており、他のセミナーに比べてより具体的な問題を、現場により近い立場で議論していた。栄養改善の重要度を如何に行政や一般大衆に周知させていくか、具体的な手段の議論にも熱が入っていた。ビル&メリンダ・ゲイツ財団の影響なのだろうか、ネットでの生中継や、ネットでの参加も積極的。新しいIT技術を使って、新しい手法を積極的に導入し、情報のアクセス機会を増すという姿勢が感じられた。



IMFはより大所高所からの議論が主体。ラガルト専務とムニューヒン財務長官との対談は、Bloombergのニュースにも。アフリカの開発に関する議論は、沢山のアフリカ人が集まり、人数と熱気は圧倒だった。また、最新のデジタル技術をどう利用していくかのセミナーや討論会に二日間まるごとを費やしており、徴税業務の効率化が一つの目的ではあるものの、開発行政の為のデータ解析と、商行為の透明化による脱税と汚職の防止に力点が置かれていた。明白な発言は無かったものの、こうした新しい技術はインフラの遅れた開発途上国の方が導入しやすく、その結果、脱税や汚職が減ってくれれば、開発行政もやり易くなるというニュアンスを感じた。



最後に、世界銀行の外側を飾る、今回の会議のメッセージ写真。



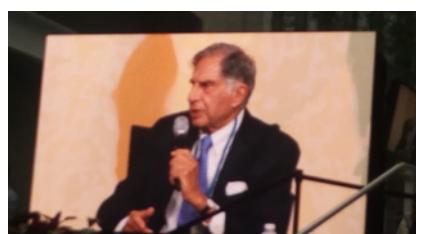
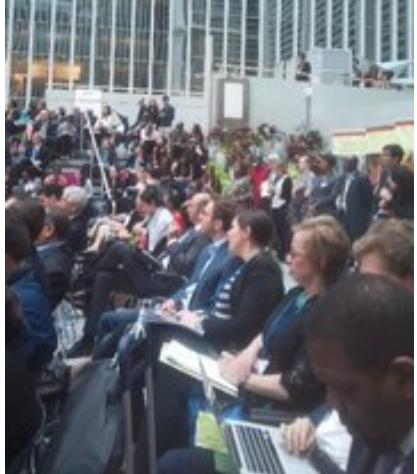
本部に戻って

3カ月余りの長期出張から帰国して1週間が経過した。ナイロビでは、現地で実施中の結核予防事業が業務の中心であったが、本部ではリザルツが今関わっている様々な事柄が、耳に入ってくる。早速今週の予定には、外務省とNGOの会合があり、ODA資金の対象事業についてのガイドラインが、変更される可能性が有ることで、各団体も関心を持っている。また、ナイロビとの違いでは、ネット環境が挙げられる。滞在中は一時的にせよ繋がらないことが多くあったが、悩みながらもその解決策や気が付いた点など、いくつか修得することが出来たこともある。ケニアで活動しているNGO/NPOは数団体あるが、個別に連絡したり相談したりすることはあるても、日本でのようにいろいろな協議会、フォーラム、勉強会などはなかったようで、特に組織運営・管理に関する情報が欲しいときに、相談先が有ればと感じた。今後はNGO関係者との交流を更に進め、また他の分野の方たちとの交流の場にも参加していければと考えている。

2017年04月24日

どーらのワシントン珍道中

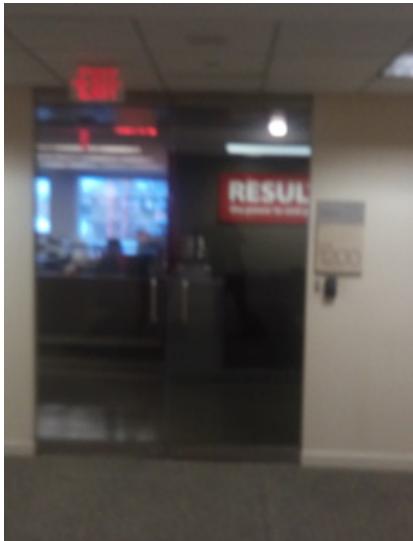
当団体のスタッフは、第95回世銀・IMF合同開発委員会に出席するためワシントンDCを訪れている。



今回の会議は、全体を通じて栄養が全面に打ち出されていたとのこと。日本でも GNR セミナーが開かれるなど栄養改善の機運が高まっている。ますます盛り上げていきたい。

ワシントンDCの訪問を終えて

白須代表と訪れたワシントンDCでの、世界銀行の春季会合セミナーは、昨日の日曜が最終日。今日は、ホテルと同じブロックにある米国リザルツの本部を訪問し、その後、米州開発銀行(IDB)に。米国リザルツの本部は、立派なビルの12階。一階に「Nerds and Nibblers」というカフェがあり、妙な名前だなと思ったが、考えてみると、韻を踏んでいるだけでなく、米国の大手本屋チェーンの「Barns and Novels」をもじった冗談で、ロゴが似ていた。



今日の仕事を終えて、今回の出張で始めてテレビをつけて、ホッとしながらブログを書いている。今頃気付くとは胡乱な話で恐縮だが、アイスホッケーとバスケットボールのプレイオフが始まっている。冬季スポーツが終わり、夏のスポーツが盛りを迎える時期だという事なのだろう。先日、ホッケーのユニフォームを着て歩いている人を見かけた記憶がある。考えてみれば、ワシントンDCは、野球とアメフトを加えた四大プロスポーツのチームを抱えている全米でも数少ない街だ。もっとも、今日も朝から冷たい雨が降る肌寒い一日。様々なセミナーに参加できた貴重な時間だったが、天気には最後まで恵まれなかった。それでも、桜の木には青い葉が茂り、ハナミズキが冷雨に負けず凜とした姿を見せてくれている。明日は、朝にホテルをたって、一直線に日本に。

Gavi がマラリアワクチン試験接種実施へ

日本リザルツが Gavi ワクチンアライアンスキャンペーン事務局をしており、資金提供をしているマラリアワクチンの試験接種が始まるとのびっくりするニュースが入った。以下がニュースリリース。

=世界初の試験的接種がアフリカ 3 国で実施されます：Gavi を含む資金提供者は、世界初のマラリアワクチンの開発における新たなステップを歓迎します=

WHO は、世界初のマラリアワクチンである RTS,S の接種が 2018 年にガーナ・ケニア・マラウイにおいて始まるという声明を出した。これは、マラリアワクチンの世界規模の実用化に一歩近づいたということでもある。RTS,S ワクチンは 4 回接種が必要だ。今回の試験的接種は、このワクチンが子どもたちの死亡率を下げるにあたっての役割と定期接種の枠内で接種した場合の安全性について、上記 3 カ国の実際の状況でテストするための試みだ。Gavi、世界基金、ユニットエイドの三機関が 49.2 億ドルを投じてこの試験的接種の第 1 フェーズを財政支援し、実施はガーナ、ケニア、マラウイの保健省が WHO と協力して行う。

Gavi のセス・バークレー CEO は、「この世界初のマラリアワクチンの開発には 30 年もの年月が費やされた。従って今回は素晴らしい快挙といえます」と述べた。

「今日の声明は、同ワクチンが全世界で接種されるようになるための重要な一步だ。マラリアによって最貧国の多くの人々がとても苦しんでいる。何千もの命が奪われ、経済発展をも妨げている。この試験的接種は、これらの負荷を軽減するためにこのワクチンがどのような効果を持つかを探る重要な役割を果たすだろう」

このワクチンは、選ばれた地域に住む子どもたちを対象とした定期予防接種を通じて提供される。3 カ国の予防接種実施機関は、WHO のアドバイスに従ってそれぞれ接種スケジュールを提示することになる。このワク

チンは4回接種が必要。初回は生後5ヶ月以降のなるべく早い時期に、2回目及び3回目は初回から数ヶ月の間を置いて接種する必要がある。4回目は、3回目接種後15-18ヶ月の間に接種される。このワクチンはパイロット実施各国のすべての地域に提供されるわけではなく、また成人や接種対象年齢の子どもたち以外には提供されない。この試験的接種の最初のフェーズが完了するのは2020年、第2フェーズは2022年に終わる予定。結果は、今後より大規模にワクチンを提供するための意思決定のベースとして使われる。

2017年04月25日

リザルマくん

すみれちゃん葉書がつい先日完成したが、それで思い出すのが、リザルマくんだ。リザルマくんは2011年11月のブログに初登場し、頼もしいリザルツの応援団長として12月には葉書に変身した。

今回は小さなすみれの花がすみれちゃんになり、らぽーる事業のりこちゃんのお友達として葉書に変身した。小さなものをつけしむ眼は大事だ。



葉書になる前のリザルマくん



リザルマくん葉書

2017年04月27日

本部に戻って(2)

暫く振りに本部に戻って感じたことは、プロジェクトの運営管理のように、具体的なものや計算できる対象を中心に考える案件より、いくつかの要件、背景を理解したうえで、対処していく業務の進め方の方が多いようと思われることだ。これはリザルツの事業の特性にあるかも知れない。先日は「2016年国際栄養報告」や「人口と食料安全保障会議」を傍聴した。また今日は“外務省とNGOとの懇談会”が開かれ、G7やG20に向けての保健の方向性などや、外務省国際保健政策室長からの報告をはじめ、一番関心のあった、NGO連携無償ガイドラインの変更などが議題となった。残念ながら出席は出来なかったが、“貧困と飢餓を撲滅”する大儀、方針をもつ当団体として、どのように解決していくか、絶えず回答を求められているような気がする。そう簡単に解決策が出る訳ではないので、外部の組織、専門家あるいは巷の人たちの意見、協力を得ながら、目的に向かって進めていくことが、必要となっていると思う。リザルツでは現在、国内外で2つの事業を手掛けている。釜石市では親子・家庭問題を扱い、海外ではナイロビ市内スラム地区での“結核予防・啓発活動”がある。今

後も事業を通じて、現場の実態を知り、様々なセミナー、シンポジウムや勉強会を利用することで、個人の基礎知識と外部コネクションを更に充実させ、我々の活動に活かせていくべきと考えている。

2017年04月28日

釜石に来ました

釜石に1週間ばかりの行程でやってきた。青葉通りこどもの相談室が入居する青葉ビル、眩しいほどの光が差しこみ、多くの方々の交流や憩の場所になっている。朝はデイサービスや作業所のお迎えのバスを待つ方々、日中は馴染みの方と交流する方々、午後は学校帰りの子供たち、夕方はサークルのメンバーたち。そんな皆様方に、青葉通りこどもの相談室をもっと知っていたくため、新しい看板を作った。「こんな些細な相談なんか・・・」と思っている方々でも利用しやすいよう、肩肘張らないポップなイメージにした。



ナイロビ生活 vol7 "CHV Profile 編"

今回は先日のスタッフの打ち合わせで私が提案した CHV Profile について書こうと思う。

日本リザルツでは、カンゲミ地域で 80 名の CHV を結核についてトレーニングを行い、彼らの活動を支えている。月例でレポートを提出してもらい、活動についてアドバイスなどをしている。やはり効果的なアドバイスには彼らの背景と性格を理解することが重要だ。今まで何人かの CHV と話す機会があったが、80 名は一筋縄ではいかない。そこで今後、全 CHV 80 名の活動に同行するカルヴィンに CHV Profile の作成をお願いしている。CHV Profile には名前や電話番号などの基本情報から、カルヴィンが感じた性格などを記入してもらっている。しかし、CHV Profile 作成する際には慎重にならなければいけない。CHV によっては嫌悪を感じる方もいらっしゃるので、個人情報の取り扱いには気をつける必要がある。

離婚と子供たち

昨日の新聞に、離婚で子供と離別した男性の苦悩をまとめた、ノンフィクションの紹介記事が出ていた。約 20 名の男性にインタビューし、その生い立ちから、結婚、子どもの誕生、そして離婚した今の状況について書かれている。総じて、男性は女性(母親)が連れて行った子供に会えず、一人孤独な生活を送っているようだ。1990 年代までは女性が一人で出していくことが多かったが、DV 防止法の施行や女性の社会進出、地位向上も何らかの影響を与えているのではないかと思う。たとえ DV が無かったとしても、世間の風潮と相まって、女性側の権利を認めすぎる傾向にあるのではないかと、著者は語っていた。少子化が進む中で、男性も子どもへの愛着、子どもを育てたいと自覚する傾向が強くなり、親権をめぐる争いが多くなっているようだ。しかし男性・女性それぞれが子どもに対し、強い愛情を持つほど、子どもの権利・意志が軽んじられてしまう気がする。離婚後約 70% の子供が別居親と面会交流していないとの調査結果もある。H24 年に民法が改正され、離婚に際し

面会交流と養育費について、子供の利益を最優先にする旨定められたが、十分に効果が出ていないようだ。司法が家庭内にまで入り込むことの難しさを感じる。それでも、子供の利益を考慮すれば、離婚後の両親が協力して子供を見守り、育していくことが重要であり、アメリカでは親に対する教育プログラムが義務付けられているそうだ。日本でも同じような仕組みは有るが、家庭裁判所の基準は十分とは言えない。リザルツが行っている事業の中にも、離婚と子どもに関する相談などがあり、専門の相談員が対応している。子と思う気持ちが、独り歩きすることで、子供を育む環境(家庭・家族など)が狭まり、歪んだ状態になっているのではないだろうか。我々の活動が、より健全な環境の下で子どもたちを育てていく、一助になってくれればと願っている。

途上国の肥満

ケニアは世界の中でも結核高まん延国 30 力国の中に入るため、その予防・啓発は必須となっている。世界的な感染症は、住環境の不衛生、一般住民の結核に対する知識の欠如、医療機関・サービスへのアクセスの不備などの課題を、依然として抱えている。これらの問題を解決するべく、現在日本リザルツは、ナイロビ市内のスラム居住区 Kangemi 地区で「結核予防・啓発活動の拡大支援事業」を実施している。また一方で、肥満に係る非感染症の問題もクローズアップされている。ケニアの女性の過体重/肥満の割合は、都市部で 2 人に 1 人、農村部では 4 人に 1 人に上り、5 歳未満でも約 5% が過体重となっている、と 2016 年の世界栄養報告は述べている。ケニア政府は 2015 年に非感染症対策を発

表、成人の肥満と糖尿病の増加をゼロにする、目標も含まれている。確かにナイロビ市内では、男女に關係なく、多くの肥満体形の人たちを見かける。嘗ては途上国の国民は、一般的に痩せているとのイメージが強かつた気がする。肥満体形は裕福な階層だけかと考えていたが、事業地のスラム街で生活を送っている住民にも、肥満の人たちが多くいる。仮に手土産を持って行くとすると、喜ばれるのが砂糖や主食の一種“ウガリ”の材料となる、トウモロコシの粉など糖類が多い。砂糖に関しては、ティーを飲む際、スプーン 3 杯位を平気で入れるのを見ることがある。生活習慣が身についてしまい、本来の栄養そのもの、また摂取の仕方も十分に理解していないように思う。我々の活動部隊である CHV の人たちも、導入研修やフォローアップ研修などで、結核に関する知識だけでなく、栄養に関する基本的知識も修得し、住民の相談に対応している。

2017 年 04 月 30 日

ガザビジ！がテレビで放映！

日本リザルツは国連パレスチナ難民救済事業機関（UNRWA）のキャンペーン事務局をしている。UNRWA と日本リザルツが共催するガザ起業家報告会の様子が、TBS のニュースで紹介された。

ガザ地区が抱えている大きな問題の 1 つが失業だ。パレスチナ中央統計局によると、2014 年のガザの失業率は 43% と世界で最も高く、中でも、若者の失業率は 60%～70% と言われている。長期化する紛争に加え、大学を卒業しても仕事がないため貧困に喘ぐ日々…ガザの若者たちは二重の苦しみを抱え、先の見えない日々を過ごして



いる。この状況を打開するために発足したのが、JAPAN GAZA INOVATION CHALLENGE（ガザビジ！）だ。テレビでの放映を通じて、ガザビジ！への応援団が増えることを願っている。

模様替え in 釜石

『こころのケア』、大事なことだと理解している一方、自分が利用するとなるとちょっと・・・、と抵抗感をお持ちの方もいらっしゃると思う。釜石でのこどもの相談室、多くの方々に知って頂き、かつ、気軽に足を踏み入れて頂くため、また少し工夫をしてみた。外の通りから見える場所に、国内外の子供たちから送られてきたくまもん塗り絵のコピーを、手作りの花や動物と一緒に作品展として掲示してみた。どうだろう、何をやっているのか知りたくないならないだろうか。

ご紹介が遅れました。ガラス越しに移っているのが、私トミーです。どうぞよろしくお願ひいたします。



釜石での5S活動

5S活動とは、日本の製造業で始まり、今では医療を含むサービス業や海外でも応用されている製品の質の改善のための活動だ。私が3月まで所属していた病院も、5S活動に取り組むことで、医療の効率性を高めるだけでなく、医療事故を防止し、患者様へ提供する医療の質を改善することに成功していた。先日は、日本リザルツ釜石事務所で5S活動を行ってきた。物品を種別ごとに区分けし、かつ、在庫も一目で確認できるようレイアウトの工夫、部屋の掃除等を行った。業務が効率化するだけでなく、支援者側も働きやすい環境、そんなイメージで部屋を整えた。癒し系の謎のキャラクターもよいスピイスになっていると信じて。

